

第7章

評価・定期試験

- 第1節 通信簿
- 第2節 定期試験
(諸田 裕子)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

資料編



第1節

通信簿

02年調査に引き続き傾向として、小・中学校ともにさまざまな材料に基づいて評価を行うようになってきている様子とともに、評価の材料としてテストを重視する傾向の強まりも確認できる（たとえば、「単元末テスト」を「とても重視する」は、53.6%→71.1%）。
【Q8(学校)、Q9(教員)】

1) 1991年と2001年の改訂指導要録の特徴

02年調査時点は、「観点別学習状況」だけでなく「評定」も「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）を行うことを明記した2001年指導要録改訂直後であった。実際、調査結果からも、相対評価から絶対評価への移行がもっとも大きな変化として観察できている。戦後の指導要録改訂の歴史を振り返った場合、まず重要な分岐点とされるのは1991年（平成3年）の改訂指導要録である。いわゆる「新しい学力観」という表現が初めて用いられ、その後の教育改革路線の方向を強く条件づけることとなった改訂である。

この改訂の特徴は、①「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）による「観点別学習状況」が評価の基本となった。そのため、指導要録の記入欄の順番が変わり、相対評価による「評定」欄の前に、絶対評価による「観点別学習状況」欄がおかれた。②さらに、「観点別学習状況」に設定されていた4つの観点の記載順序が、従来の、「知識・理解」「技能」「思考」「関心・態度」から「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」へと逆転した。③所見について、長所・短所の両面からではなく、子どもの長所を取り上げること、の3点である（金子真理子、2003『中学校における評価行為の変容と帰結』『教育社会学研究』第72集、109頁）。

続く2001年（平成13年）改訂も基本的にはこ

の1991年改訂を基本路線としているが、冒頭で述べたように、2001年改訂によって、「評定」も絶対評価によって行うことになった。これが第二の分岐点といえるだろう。なお、「絶対評価」という用語は、「認定評価」「個人内評価」「到達度評価」という3つの意味で用いられてきたという（たとえば、田中・水原他、2005『新しい時代の教育課程』有斐閣など）。戦前の絶対評価はこの「認定評価」に相当する。今日の「目標に準拠した評価」は「到達度評価」に相当する。

今回の調査においては、①学力調査や学力テストへの社会的な関心が高まったことに加え、②学校がさまざまな場面で説明責任を求められるようになり、そのことにもなって「評価」を行わねばならない場面が増えたことが大きな変化である（たとえば、学校評価など）。

後述するように、実際、今回の調査結果からは、02年調査に引き続き傾向として、小・中学校ともにさまざまな材料に基づいて評価を行うようになってきている様子が観察できる。とともに、評価の材料としてテストを重視する傾向の強まりも確認できる。1991年改訂指導要録によって、それ以前のテストのみ重視するという傾向から関心・意欲・態度を重視する—「知識偏重」からの離脱といえる方向へと評価の視点は変化したわけだが、今回の調査結果は、そうした変化の方向性を既定路線としつつも、同時にテスト「も」重視という

評価理念が教員たちによって共有されていることを示唆しているのではないだろうか。ただしその場合、知識か意欲・態度かという二分法によるゆれ戻しとしてではなく、意欲・関心に加えて知識も重視する（しかも、意欲・関心以上に）という意味での知識重視の再来として位置づけることができる。

2) 具体的な評価行為について

～前回の調査報告書より～

絶対評価であるのか相対評価であるのかにかかわらず、最終的には「評定」あるいは「評語」によって指導要録や「通信簿」に評価結果を記載せねばならない（作成・発行が常態化している「通信簿」は、作成の法的根拠や義務はない）。教員たちの評価行為の実際は、たとえば、この「学習指導基本調査」の第1回～第3回の調査結果によって確認することができる（詳しい数値は第1回～第3回の『学習指導基本調査報告書』を参照）。評価期間中の期末テスト、単元末テスト、小テスト、宿題や提出物、授業中の態度などを評価材料として用い、それらの評価結果を総合して成績としている。その際、「観点別学習状況」の4観点を基本としつつ、同時に可能な限り主観的判断を排した客観的な評価を行うために、「ふだんから『学習の記録』を意識して記録などをとって」いたり、「テストの得点を観点別に集計」したり、「テスト以外の様々な評価基準もいったん点数化」するなどしている。また、説明責任を果たすために、多くの教員が「評価するときの具体的な規準や手順について、児童・生徒や保護者に話して」

いる。こうした、評価をめぐる学校の現状は、「評価の点数化・細分化・日常化」といえるものである（2003『第3回学習指導基本調査報告書』8章3節）。また、平成18年度に文部科学省の委託を受けて東京大学が行った「教員勤務実態調査（小・中学校）」によれば、残業時間・持ち帰り時間における業務内訳についての回答結果からは、約半年を通じて、「授業準備」とともに「成績処理」に多くの時間をあてている現状が明らかとなっている。

3) 通信簿の「学習の記録」に取り入れている形式

通信簿の「学習の記録」に取り入れている形式についてみると（表7-1-1）、小学校、中学校ともに「観点別学習状況の評価」がもっとも多く9割以上を占める。小学校と中学校の相違点は、「教科ごとに2段階、3段階、5段階などの総合的な評定」を取り入れているのが小学校で51.9%に対して中学校では89.6%。また、「文章記述形式の評価」が小学校7割に対して中学校5割、「単元や具体的項目ごとの到達度評価」は小学校25.9%に対して中学校9.1%である。これらの結果から、小学校ではさまざまな評価方法を導入しているのに対し、中学校では「評定」と「観点別」の2つに集約される傾向を特徴として読み取ることができる。図表は省略するが、今回の調査結果を確認してみると、小学校では、「観点別」と「評定」の両方の形式を取り入れているのは全体の48.7%、「評定のみ」は3.2%、「観点別のみ」は42.2%とな

表7-1-1 通信簿作成の形式（小・中学校）

(%)

	小学校 (n=528)	中学校 (n=559)
観点別学習状況の評価	90.9	96.1
教科ごとに2段階、3段階、5段階などの総合的な評定	51.9	89.6
文章記述形式の評価	70.3	50.1
単元や具体的項目ごとの到達度評価	25.9	9.1
児童・生徒による自己評価	8.9	11.4
その他	1.7	0.9

注) 複数回答。

っている。他方、中学校では、両方の形式を取り入れているのは全体の87.5%であり、「評定のみ」は2.1%、「観点別のみ」は8.6%となっていた。

4) 通信簿をつけるときに重視すること

次に、小学校教員（算数を教えている教員のみ）に通信簿をつけるときに重視することをたずねた結果をみってみると（表7-1-2）、02年調査との比較では、いずれの項目についても「とても重視する」の割合は増加傾向にある。そして、テスト類（「単元末テスト」「まとめ（学期末等）のテスト」）を「とても重視する」傾向の強まり>「宿題や提出物の状況」や「授業中の態度」を「とても重視する」傾向の強まりとなっている点が特徴的である。たとえば、「単元末テスト」を「とても重視する」割合は、53.6%→71.1%に対して、「授業中の態度」を「とても重視する」は36.3%→47.6%である。ちなみに、小学校教員で、すべての評価材料について「とても重視する」と回答した割合は9.3%となっている（図表省略）。

これらの数値を教職経験年数別にみってみると、経験年数による違いはほとんどの項目でみられない。唯一、「11～20年目」までと「21～30年目」以上とでクリアに回答が分岐したのが「授業中の態度」を「とても重視する」の割合である。しかも、経験年数が長くなるにつれて「とても重視する」割合が減少している。いわゆる「態度主義」がより強いわれだしたのは、新学力観（1990年以降）が打ち出されて以降である。そのときすでに教員として少なくとも数年を経験したグループとそうではないグループ（07年調査時点で教職経験年数が20年未満とそれ以上が分岐点となる）で回答が異なっている点は興味深い。

では、中学校教員は通信簿をつけるときに何を重視しているのだろうか。表7-1-3によれば、02年調査との比較では、いずれの項目においても「とても重視する」の割合は増加傾向にあり、これは、先に検討した小学校教員と同様である。今回の調査結果についてみってみると、担当学年によ

る違いはみられないものの、教職経験年数による違いが見い出せる項目がある。それは、「宿題や提出物の状況」および「授業中の態度」についてであり、「31年目以上」とそれ以外で重視の傾向が分岐している。そして、「授業中の態度」を「とても重視する」割合は小学校の場合と同様に、経験年数が長くなるにつれ減少している。担当教科別でみた場合、大きな違いはないが、国語および外国語において、「小テスト」を「とても重視する」割合が他の教科に比べて高いのが特徴的である。

5) 強化されていく、評価の「日常化」

この「通信簿作成時に重視すること」について、小学校と中学校を比較したものが表7-1-4である。ただし、小学校は算数を教えている教員のみ質問、中学校は数学担当教員に限定した数値となっている。テストも重視しつつ同時に、「小テスト」「宿題や提出物の状況」「授業中の態度」といった、いずれも日常的な場面を評価の材料として重視している割合が、中学校教員において、小学校教員と比較して相対的に高くなっていることが明らかである。

この傾向は02年調査の報告書（『第3回学習指導基本調査報告書』）でも指摘されていた問題点である。子どもたちは学校のあらゆる場面で「評価」され、教員はあらゆる場面を「評価」の対象として把握し、かつ、説明せねばならない状況にある。「評価」という視線で学校を埋めつくすことの帰結について丁寧に検討していく必要があることをここでは指摘しておきたい。子どもにとっては「評価」が学力保障に結びついているのかどうか、教員については学習指導方法の見直しに活かされているのかどうか、あるいは、活かすことが可能な評価方法や内容なのか。さらに、このような全方位的な評価体制の強化傾向は、「多忙化」問題をはじめとした教員の悩みや勤務実態とどのような関係にあるのかについても、適切に採取されたデータに基づいて議論を展開していく必要があるのではないだろうか。

表7-1-2 通信簿作成時に重視すること（小学校教員／経年比較・教職経験年数別）（％）

		全体		教職経験年数別				
		02年調査 (n=3,106)	07年調査 (n=1,766)	5年目以下 (n=236)	6～10年目 (n=154)	11～20年目 (n=466)	21～30年目 (n=693)	31年目以上 (n=195)
単元末テスト	とても重視する	53.6	71.1	70.8	73.4	73.0	70.7	66.2
	まあ重視する	44.1	28.5	28.8	26.6	26.8	28.6	33.8
	あまり重視しない	2.0	0.3	0.4	0.0	0.2	0.4	0.0
	無答不明	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0
まとめ (学期末等) のテスト	とても重視する	31.1	55.3	53.0	57.8	56.7	55.3	53.3
	まあ重視する	57.6	40.7	45.3	40.9	39.7	40.1	40.5
	あまり重視しない	10.7	3.5	1.3	1.3	3.6	3.9	4.6
	無答不明	0.6	0.5	0.4	0.0	0.0	0.7	1.5
小テスト	とても重視する	22.7	23.6	21.2	26.6	27.0	22.1	22.6
	まあ重視する	65.3	65.5	65.7	63.6	62.9	66.7	66.2
	あまり重視しない	11.6	10.1	12.7	9.7	9.2	10.4	9.7
	無答不明	0.4	0.8	0.4	0.0	0.9	0.9	1.5
宿題や提出物の 状況	とても重視する	16.4	24.9	25.8	25.3	28.1	22.9	24.1
	まあ重視する	66.1	63.0	66.5	58.4	60.9	63.3	64.1
	あまり重視しない	17.2	11.4	7.2	15.6	10.5	12.4	11.3
	無答不明	0.3	0.8	0.4	0.6	0.4	1.3	0.5
授業中の態度	とても重視する	36.3	47.6	52.5	52.6	52.6	43.9	39.0
	まあ重視する	59.1	48.6	45.3	42.9	44.8	51.1	56.4
	あまり重視しない	4.3	3.5	1.7	3.9	2.6	4.5	4.1
	無答不明	0.3	0.4	0.4	0.6	0.0	0.6	0.5

注) 02年調査、07年調査ともに算数を教えている教員のみ対象。

表7-1-3 通信簿作成時に重視すること（中学校教員／経年比較・教職経験年数別・担当教科別）（％）

	全体		教職経験年数別					担当教科別				
	02年調査 (n=2,891)	07年調査 (n=2,109)	5年目以下 (n=336)	6～10年目 (n=238)	11～20年目 (n=610)	21～30年目 (n=800)	31年目以上 (n=113)	国語 (n=390)	社会 (n=398)	数学 (n=492)	理科 (n=407)	外国語 (n=406)
定期試験	57.6	80.6	79.5	84.5	78.5	81.1	81.4	75.4	78.6	88.8	77.4	82.0
実力試験	12.7	17.6	17.9	22.7	16.7	16.4	19.5	18.2	13.8	18.9	16.5	20.4
小テスト	28.3	33.8	29.5	36.1	35.2	34.4	28.3	38.2	25.9	35.4	29.2	40.1
宿題や提出物の状況	48.7	60.3	60.7	59.7	62.0	61.0	44.2	65.9	58.5	63.2	58.2	54.9
授業中の態度	47.0	50.6	52.1	50.4	56.1	47.3	39.8	52.8	48.7	54.3	48.4	47.3

注) 数値は「とても重視する」の％。

表7-1-4 通信簿作成時に重視すること（小・中学校教員／算数と数学）

(％)

	小学校教員 算数 (n=1,766)	中学校教員 数学 (n=492)
単元末テスト	71.1	
定期試験		88.8
まとめ(学期末等)のテスト	55.3	
実力試験		18.9
小テスト	23.6	35.4
宿題や提出物の状況	24.9	63.2
授業中の態度	47.6	54.3

注1) 小学校は算数を教えている教員のみ、中学校は数学を担当している教員のみ対象。

注2) 数値は「とても重視する」の％。

第2節

定期試験

学校の授業で用いたもの(教科書や問題集、ノート)を中心に定期試験問題を作成し、「観点別学習状況の各項目に合わせて問題を作成する」という傾向は02年調査と同様である。他方、「論述式の問題を出す」という回答割合は年々増加しており(97年調査53.3%→02年調査58.3%→07年調査62.4%)、「テスト問題を練る十分な時間がない」は減少傾向にある。

【Q9(中・学校)、Q10(中・教員)】

1) 定期試験の実施学年と回数(中学校のみ)

中学校および中学校教員に対しては「定期試験」についてもたずねている。学校調査で「定期試験」「実力試験」の実施学年と回数をたずねた結果をまとめた図7-2-1によれば、①定期試験の回数は「4回」に集中し、②実力試験の回数については、中1生、中2生は「0回」～「3回」までに分散、③中3生では「3回」～「7回以上」へ分散しつつ、より多い回数を選択する割合が中1生、中2生の場合よりも高くなっていることがわかる。

2) 定期試験の出題内容、出題形式や方針(中学校教員のみ)

今回の調査では、02年調査に引き続き、中学校教員に定期試験の問題作成時の材料や作成方針についてもたずねている(図7-2-2)。97年調査から02年調査にかけてはその数値に変化がなく、今回の07年調査で増加したのは、「学校で使わない問題集・参考書などから問題を出す」「市販のテストを参考にしている」「入試問題に対応した問題を出す」の3項目である。また、学校の授業で用いたもの(教科書や問題集、ノート)が中心となっている傾向や「観点別学習状況の各項目に合わせて問題を作成する」という

傾向は02年調査と同様である。ただし、「論述式の問題を出す」という回答割合が年々高くなっている(97年調査53.3%→02年調査58.3%→07年調査62.4%)。もちろん、「論述式」の内容の変化まで踏み込んだ調査設計ではないので、試験内容の出題形式とそこで測定されている「学力」との関係について一義的には判断できない点には留意せねばならない。

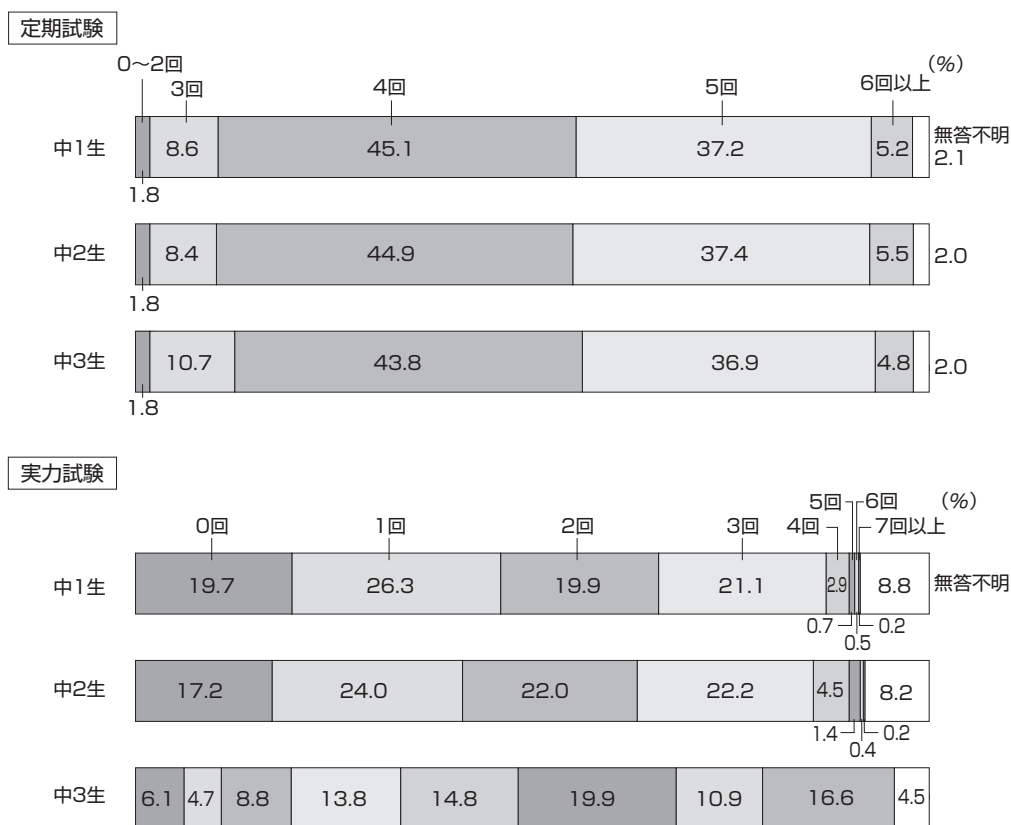
なお、02年調査結果との比較で減少傾向となっていたのは「テスト問題を練る十分な時間がない」という項目であった。教員の多忙化が以前にも増して問題となっている昨今ではあるが、この減少傾向をもたらした要因としては、たとえば、「テスト問題を練る」ことをあまりしなくなった(関心をもたなくなった?)ことによるのか、教員自身で練らなくても十分なほどにさまざまなテスト問題が提供され、容易に入手できるようになっているためなのかといったことも考えられるのではないだろうか。

最後に、「定期試験」の問題作成内容と、「授業や生活指導の面で大切にしていること」をたずねた設問(p.146、10章1節参照)中の1対である「受験に役立つ力を、学校の授業でも身につけさせること」―「受験指導は塾などに任せて、学校では基礎的事項を教えること」との関係に

ついて整理した表7-2-1をみてみよう。教員
 個々人がもつ教育観によって試験問題作成—学
 習指導方法の一環である—はどのように異なっ
 ているのだろうか。表からは、「受験に役立つ
 力」を学校の授業でも身につけることを大切に

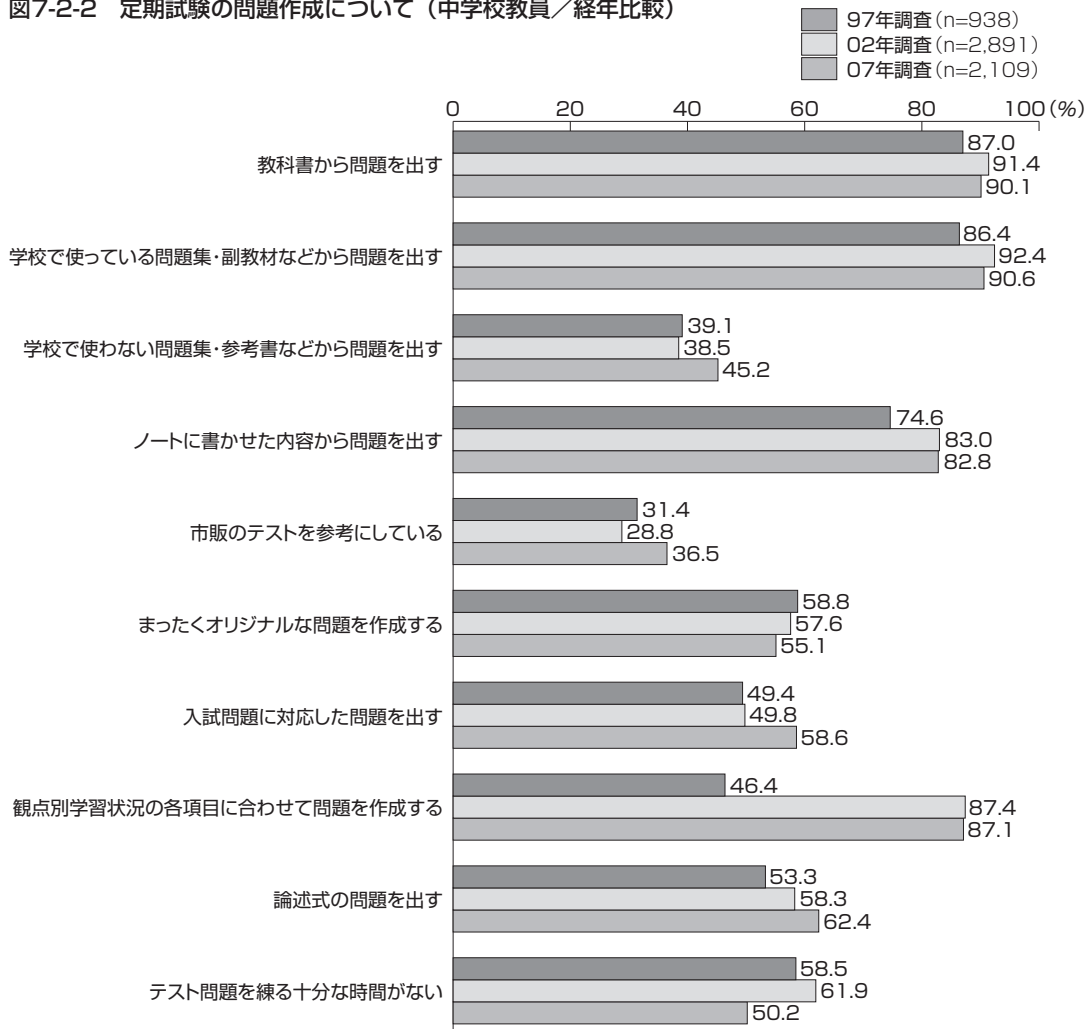
している教員ほど、定期試験では入試問題に対
 応した内容を出題していることが確認できる。ち
 なみに、「入試問題に対応した問題を出す」と回
 答している教員の場合、「論述式の問題を出す」
 割合が高くなっている（図表省略）。

図7-2-1 試験の実施回数（中学校）（n=559）



注)「定期試験」「実力試験」それぞれについて、学年ごとに実施している回数を記入してもらったものを集計したものである。

図7-2-2 定期試験の問題作成について（中学校教員／経年比較）



注) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

表7-2-1 「授業や生活指導の面で大切にしていること」と定期試験の問題作成について（中学校教員） (%)

		入試問題に対応した問題を出す	
		あてはまる	あてはまらない
授業や生活指導の面で大切にしていること	受験に役立つ力を、学校の授業でも身につけさせること (n=1,655)	63.5	36.5
	受験指導は塾などに任せて、学校では基礎的事項を教えること (n=370)	41.6	58.3

注1) 「あてはまる」は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%、
「あてはまらない」は、「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」の%。

注2) 「無答不明」は省略した。